『繁野話』の方法

太刀川　清

『繁野話』は『英草紙』（寛延二年刊）に次ぐ都賀庭鐘三部作の第二作である。なぜに『英草紙』を問わずして『繁野話』に及ぶかといえば、『繁野話』にしてはじめて、中国小説を扱う態度がその人自身の口から語られているからである。

一

近路行者三十年前、国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ、千里浪子其中に就て英草紙九篇を摘みて書林に授けたるは廿年に早なりぬ。（『繁野話』　序文）

二十年というが『英草紙』に後れること十七年、『繁野話』は明和三年正月に刊行された。「英草紙後篇」と角書きするだけあって、体裁も『英草紙』に倣って五巻九篇、巻三の他は各巻二篇、巻三を上下に分けて、最長篇「白菊方猿掛の岸に怪骨を射る話」の一篇を収めるなど『英草紙』が巻三を「紀任重陰司に到て滞獄を断る話」一篇に宛てたのと全く同様である。(注1)

さて、『繁野話』の序文を見て、遡って『英草紙』のそれと比較すると、庭鐘がこの国字小説を編むことへの期待が確かに変って来ている。その一つは『英草紙』に見られた教訓的叙述が『繁野話』に見られないこと。その二つは所収諸篇について典拠その他を『繁野話』では盛んに解説することで、これは『英草紙』にはなかったことである。

すなわち『英草紙』の序文に就けば、

彼の釈氏の説けるところ、荘子が言ふ処皆怪誕にして終に教となる。紫の物語は言葉を設けて志を見し、人情の有る処を尽す。兼好が草紙は惟仮初に書ける が如くなれども、世を遁る事の高きに趣を帰す。今の世大道を照すに人乏しく光をつつむ人はなほ更なれば、明教につかんと欲する人も其懐璧の円ならぬを疵瑕としてこれを顧みず。或はをしへを受くる者も、琢磨の意浅ければ眼を生じ易し。金玉の言耳悦ばしからぬ謂歟。

まず『英草紙』が表向き教訓と意図するものであったことは明かである。しかしそれが後の読本作家のように勧善懲悪といった露骨な教訓を意図するものでなかったとしても、(注2)従来の怪異小説のように仏教的なものでなく儒家の人倫の教えが問題となっているところに意義があった。これは庭鐘が、原拠との関係上「今古奇観」を意識したからであろうが、「今古奇観」は、その内容が概ね市民思想(注3)感情を代弁して、現実の社会に鋭い批判の眼を向けたものであったから、当然儒家の道義が問題になる。よって『英草紙』もまた「鄙言却て俗の敝となり、これより義にすすむ事ありて」（序文）とその種の教訓的意義のあることを明かにするところとなった。しかし考えてみれば、この種の表現が、従来の怪異小説、たとえば「只児女の聞をおどろかし、おのづから心あらため正道におもむくひとつの補とせむ」と言った『伽婢子』（寛文六年刊）流の教訓的叙述とどれだけの違いがあろうか。『英草紙』九篇の内容が怪誕を語るもの半数に足りない三篇で、(注4)あとは現実的な物語であったとしても、庭鐘がここで怪異小説を意識していたことは間違いなさそうである。

しかるに『繁野話』では、この教訓的叙述はなくなり、かわって所収各篇の原拠その他を解説することに情熱を傾けるのである。

『繁野話』の序文に就けば、

其首なる雲のたちゐる談は、是をこそ一方の雲の賦と号すべきか（第一篇・雲魂雲情を告て太平を誓ふ話）守屋の連不言の裏に意ふかく厩戸の理もよく展びたり（第二篇・守屋臣残生を草莽に引話）手束弓の故事に住氏の伝奇を槃ぎ、

邪色の人を蕩すことを覚す（第三篇・紀の関守が紫霊弓一日一白鳥に化する話）
白菊の巻は白猿梅嶺の旧趣を仮り、占トの前数に因ることを説き女教の名実全たからんことをはげましむ（第五篇　白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話）唐船の弥言は聚散の悲喜を尽し（第六篇　素卿宮二児を唐船に携る話）望月の寓言に龍雷の表裏たるを断る（第七篇　望月三郎兼舎龍窟に龍と語る話）江口の始終は杜十娘を翻して、俠妓の偏性をかたり、子弟の戒となる（第八篇　江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話）宇佐美宇津宮の戦略は、軍機の得失顕らかに南朝の絶えざる昔物語見ゆ（第九篇、宇佐美宇津宮遊船を飾て敵を平る話）

そこに関係する篇名を示しながら序文をそのまま引用したが、こうした解説的な言述が怪異小説ではおよそ無用のものであり、これまでの怪異小説で遂ぞ見ることのなかったところであった。ここに於いて作者の創作意識は明かに怪異小説を離れて、別途にあったということになり、それが同好同臭の徒に向けた戯れ書きであったと言われる所以である。[注5] 庭鐘が『英草紙』の序文で「此草紙を記して同社中の茶話に代ふるを本意とす」と言ったのも、ここに到って確かなものになったということになり、それはまた庭鐘のいう国字小説の意義は『繁野話』に於て明らかにされたことを意味する。

さて、庭鐘が序文で原拠にふれるのは「任氏伝」に拠ったという第三篇「紀の関守が霊弓一旦白鳥に化する話」。「白猿伝」とそれから転化した「陳従善梅嶺失渾家」古今小説・巻二〇）又は「陳巡検梅嶺失妻」（清平山堂話本）に拠った第五篇「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」それに「杜十娘怒沈百宝箱」（警世通言・第三二・今古奇観第五）に拠った第八篇「江口の遊女薄情を恨て珠玉を沈る話」である。他の篇についても原拠が明らかにされるべきであるが、庭鐘自身も語らず、後人の詮索も目下のところ見かけない。その余の原拠の追究はさておき、作者自ら原拠を明らかにしたこの三篇には庭鐘の特別の見識あってのものと考えることが出来まいか。

そう考えて見ると、その表現が決して一様でないことに気付くのである。すなわち、

手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ（第三篇）
白菊の巻は白猿梅嶺の旧趣を仮り（第五篇）
江口の始終は杜十娘を翻して（第八篇）

とあるところで、「繋ぎ」「旧趣を仮り」「翻して」の三様の表現は庭鐘の原拠に対する扱い方の相違と見るのは如何であろうか。故意に表現を変えたところではなかったか。

二

まず第三篇の「繋ぐ」と表現したところをみるに、この篇の原拠「任氏伝」（唐・沈既済）との関係は、すでに説かれるところ「韋氏君を山口庄司次郎、鄭六を橘雪名、任氏を小蝶として其関係を模したのみで、高向太夫及びその女、登美の夏人及びその妻に関する物語は任氏伝には見えない。むしろ今昔物語巻三〇「人妻化成その後成鳥飛失語」に拠った」[注6]、と、すべてはこれに尽きるが、庭鐘の言うところを素直に解するなら「手束弓の故事」の物語化ないしは小説化のために「任氏伝」を「繋いだ」と言いたかったのであろう。

さて、その「手束弓の故事」とは、起源は明らかでないが「今昔物語」に伝えるところ、また「俊秘抄」（源俊頼）にも載るところに従えば、夢中で最愛の妻に離別を告げられた某は夢覚めて後、妻が弓と化したことを知った。月を経て白鳥となって去った妻を遂いもとめて紀伊国に赴いたが「朝もよひ紀の川ゆすり行く水のいづさやむさやいるさやむさや」と詠んで空しく戻るのである。

その「手束弓の故事」が関係するのは物語の半ばで登美の夏人の登場からである。

爰に和泉国の旧族、登美の夏人といふ富民あり、親なるものの代より堅く殺生をいましめて夏人に至りても、只生けるを助くるを以て心とし、他人の殺生をも説きさとし休めしむ、女房は後の母の、前に嫁したる所に出世せし女を具して此家に嫁し来り、夏人に配せたるにて、誠に髪を結びたるよりの夫婦、別きて女の心かしこく、夫をたすけて家を治め、水と魚の和合、住みこしことをかぞふれば、十といひつつ七とせの秋、ならび寝ねたる夫の夢に、妻かなしみかたるやう「年ごろかく相なれて、中途に捨て奉るは、物の情しらぬに似たれども、我は母なる人の志をつぎ一類の為に遥かなる所に行むかへば、今より長く別れ参らせん。此一品を記念にとどめ置く、我思ひをなして手なれ給へ」と涙を枕にそそぎ立ちあがり、右見左見回顧て、放出のかたに出づるを見て、夢さめみれば女はなく、枕上に見馴れぬ一張の弓をたてたり、浅ましと足ずりして、落つる涙の水かさとなり、空魂ならばかへりくるがに、是はただ火をうち消したるがごとくにて、何をしるべに尋ぬべき。其日を菩提の日となし、供養おこたらず。この弓を傍に立ておきて、朝に執っては暮に携へ、心かれせず手馴れける。かくて二年の月日かへり来て、けふなんかたみの主の去りし日なりと、朝とく起きて席をはらひ、此弓を客位に立よせて、早膳を供じ、われも同

じく対ひ食する所に、此弓忽羽うつおとして白き鳥に変じ飛び出づる。食膳かいやり。追ひ出で見れば、南をさして飛行く。其方を目につけつつしたひ行くほどに、日も暮にちかく紀泉の堺にいたる。傍なる大木の高枝に住りたる白き鳥有り。是ならんと見あげたるに、やがて飛下り、夏人が手に留るにいたりて、原の良弓と形をかへす。あやしくも夢かと疑はれ、しばらく其処に佇立やすらふ。

「今昔物語」に大きく拠ったところで、それとの比較もなされようが、この部分を本篇全体の中で位置づけるなら、物語はまず、昔、紀泉の国境雄の山の関守山口庄司次郎は射ては中らぬことのない弓を祖先から宝蔵して、狩猟を好むことこの上もなかった。一族の者、雪名が大和から追われて妻の小蝶を伴って、この庄司次郎の許に厄介になる。庄司次郎は小蝶の容色にひかれ言い寄るが、かえって殺生を止まることを誓わされる。小蝶は実は狐であった。「任氏伝」との関係はこの小蝶が狐であることと、庄司次郎が小蝶に言い寄るところである。すなわち原拠では、鄭六の留守に韋鉴が任氏に言い寄るところで、その部分は、

鉴（韋鉴）視室内、見紅裳出于戸下、追而察焉、見任氏戢身匿于扇間、鉴引出就明而観之、殆過于所伝矣、鉴愛之発狂、乃擁而凌之不服、鉴以力制之方急、則曰服矣、請少廻旋、既釈則揮禦如初、如是者数四、鉴乃悉力急持之、任氏力竭、汗若濡雨、自度不免、乃縦体不復拒抗、而神色慘変、鉴問曰、何色之不悦、任氏長歎息曰、鄭六之可哀也、鉴曰、何謂、対曰、鄭生有六尺之軀、不能庇一婦人、豈丈夫哉、且公少豪侈、多獲佳麗、遇某之比者衆矣、而鄭生窮賤耳、所称慊者唯某而已、忍以有余之心、而奪人之不足乎、哀其窮餒不能自立、衣、公之衣食公之食、故為公所繫耳、若糠糗可給、不当至是、鉴豪俊、有義烈、聞其言遽置之、斂而謝曰、不敢、俄而鄭子至、与鉴相視哈楽、

ここは著しく『任氏伝』に拠ったところである。その後は庄司次郎は雪名夫婦を鄭重に遇するのであるが、物語は先述の登美の夏人の物語がこの後に入り、そのあと小蝶の正体が狐であるのが明かになるのは再び「任氏伝」に拠ったのである。

そして物語は最後に、狐が小蝶と化した経緯と手束弓の故事の関係が説かれることになるが、これは小蝶の言葉として語られる。

我母といふも同じ狐にて、登美の長者が為に眷属の命を免るる事幾度ならず、其報として、彼が家に掃櫛をとり、猶も雄の山の関守が殺生に耽けるを制止せんとの念ありて違せず、俄其念を続ぎて、先汝が宝弓を取隠し、我身のかはりとして重く夏人に預け、大和なる雪名をさそひ出し、此所に来り、爾が魂を迷はしめて、漸く殺生をとどめ、望たんぬと思ふ、

これが事の次第であった。

さて、ここまで執拗に物語の筋を追って来たのも「手束弓の故事」と「任氏伝」との関係を具さに見たかったからであるが、要するに、雄の山の関守庄司次郎が宝弓をもって殺生を好んだという物語の発端に続いて、「任氏伝」によって小蝶を登場させ、続いて「手束弓」で登美の夏人が現われる。そして再び「任氏伝」で小蝶の正体が明らかになり、最後に「手束弓の故事」というように、交互に二つを並べながら物語は展開していくのであって両者の錯綜は全く見られないのである。「綯交ぜ」というよりは、「繋ぎ」というべきで、手束弓の故事に任氏の伝記を繋ぎというのは正鵠を得た表現であった。

三

第五篇の「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」について庭鐘のいう「白猿梅嶺」とは、「白猿伝」とそれより転化した「陳従善梅嶺失渾家」または「陳巡検梅嶺失妻記」の両者をいうことはすでに説かれ、しかも「白猿梅嶺と並記した」のも、梅嶺の事が白猿の伝から作り出されたことを知っていたからにすぎない[注7]と直接の原拠が後者にあったことを明かにされたが、同じ「古今小説」に拠った『英草紙』のたとえば「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」（原拠「閻陰司司馬貌断獄」）や、「馬場求馬妻を沈めて樋口が婿と成る話」（原拠「金玉奴俾打薄情郎」）の場合と比較してはるかに自由な筆運びであるところは、確かに「旧趣を仮り」たものというべきである。

したがって庭鐘はその最初から原拠を顧みることはなかった。原拠は、大宋徽宗宣和三年上春のこと、陳辛字は従善、任途に就くに当って僧道に供斉する。大羅仙の紫陽真人が言うには、彼の妻これを如春といったが、千日の災のあることを憐み、一真人を道童として守らしめることにした。従善は喜びこれを伴いはしたものの、必ずしもこれに期待するものではなく、妻の如春もまた痴れ者を装う道童を嫌い、結局送りかえしてしまった。かくして災はたちどころにやって来て、従善は任地に近い梅嶺で申陽洞主の申陽公に妻の如春を奪われ、爾来三年の災を蒙るのである。

発端の紫陽真人のこの件りは、いうまでもなく道教臭の著しいところで、また物語の今後の展開を占うかの一段であるが、かかる神仙思想に馴染の薄いわが国柄に相応からずと判断したのは庭鐘であったか、ここは単に山魅の深山にあることから説き起こし、信濃椽となった守廉が飛弾と信濃の国境、岐蘇の深坂で最愛

の妻白菊を奪われることにした。もし庭鐘にそうした思惑があったとすれば、『伽婢子』の浅井了意が『剪燈新話』の「牡丹燈記」を訳した際、四明山の件りをすべて省き、三霊の供書と冥官の判詞を除いたのと同じ理由になる。

冒頭で大きく変った物語は、原拠との比較の上で著しく相違するものになった。「白菊の上」の末尾で、白菊が夢中で夫の守廉に会う件りがある。飛雲の酒席で粗忽をした科で、谷二つ隔てた先の滝の水を汲むことを命じられた白菊は、疲れて道で休んでいると思いがけず夫の守廉にめぐり会う。涙ながらに契ろうとすると、女房たちの笑いどよめくのに目を覚す。夫と思ったのは実は飛雲であって、これは飛雲が酒席の座興に見せた幻術であったのである。

また、「白菊の下」では守廉の雌の狒狒退治がそうである。奪い去られた妻を探して歩く山中で不思議な怪物を弓で射たが、一頭の雌の狒狒であった。「察するに、狒狒は必ず雌雄ある獣なり。今殺せしを見れば雌なり、今にも雄が帰り来らば、此つかれたる我々ふせぎ難かるべし」と去るのであるが、結局この雄が飛雲で白菊を奪った怪物であったわけで、これは後の伏線となっているところ。原拠では、陳従善が巡検として着任して一年、盗賊鎮山虎の討伐があって、これによって盛名の大いに上がるところであるが、これは怪物の申陽公とは何の係わりもなかった。

さて、原拠では、物語の展開に紫陽真人の神仙が大きく影響するが、千日の災がすぎて紫陽は道童を伴って再び従善の前に姿を現わす。従善の願いによって、神将を遣わして申陽公を捕え、道童をして捕われた婦女子を救い出すのであるが、これに先立って従善が路傍で占ってもらった易者の卦があった。「千日逢災厄佳人意自堅　紫陽来到日　鐘破再団円」と紫陽真人の来訪を告げていたのである。

冒頭の紫陽の件りを省いた庭鐘であったが、ここは紫陽真人に対して三依道人なる者をもってした。道人は卦を敷いて飛雲滅亡の時を予測し、雷公を遣わしてこれを殺させ、守廉に雷公の後を追わせて白菊を救い出させたのである。真人と道人というにどれほどかの違いがあろう。共に道を極めた者に与えられる最高の称号ながら一は道家にのみ係わり、一はそうまで限ることのなかったせいか。すでに道教臭を離れようとしたこの物語で庭鐘の苦心はこの辺りにも窺われる。しかもその三依道人の仙術を、

持行する孔雀明王の法は、白馬仏教を漢土に駕せざる以前に、子玄仙人西域に遊びて是を伝へてより、今爰に伝流し、病を祈り、禍を払ひ、抜苦興楽の験をあやまたず、面相玄文の占卜は往を説き来を示して違はず。

と表現するうちにそれとなく道家の神仙を匂わせながらも、またそこを離れようとする。「白菊の巻は白猿梅嶺の旧趣を仮り、占卜の前数に因ることを説き」と説明するからには「占卜の前数」への関わりを無視し得ず「旧趣を仮り」てこの一篇を成したのである。

四

残る一篇は「江口の始終は杜十娘を翻して」と言った第八篇「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」である。原拠の「杜十娘怒沈百宝箱」のあらすじはこうである。

万暦二十年、北京の妓楼に杜十娘という名妓がいた。李甲という青年と交情を重ねること度々であったが、李甲が無一文になると強欲な女将は二人の間をさこうとして十日以内に三百両の金を作って杜十娘を身請けするように強要した。杜十娘は李甲のために半分の百五十両を出し、友人の柳遇春も李甲に同情して不足の百五十両を工面してくれたので、李甲は杜十娘を身請けすることが出来た。二人が北京を離れて瓜州まで来た時、孫富という金持ちの若者が杜十娘を見染め、父の怒りを恐れて優柔不断の李甲を口説いて千両で杜十娘を譲り受ける相談をきめてしまった。それを知った杜十娘は激しく二人を罵り、持って来た宝玉箱を二人の前で惜気もなく水中に投げ棄て、自分も水にとび込んでしまう。それを見た李甲は気違いになり、一生なおらず、孫富も病気になり、一と月ほどして死んでしまった。

その後、柳遇春が北京から帰郷の途中、瓜州に到り、船ばたで顔を洗わうとして洗面器を落したので船頭に引きあげさせると、その中に宝玉箱が入っていた。その夜の柳遇春の夢に杜十娘があらわれ、李甲の薄情を訴え、宝玉箱はかつての情への御礼であると語ると思うと夢がさめた。

これと「江口の遊女薄情を憤りて珠玉を沈むる話」と比較するなら、後述するように庭鐘には多少の創意はあったにしても「江口の遊女の話は、万暦を鎌倉時代とし、北京を江口とし、李甲・杜十娘・柳遇春・孫富の名を箱崎小太郎安方・白妙・岸惣官成雙・柴江酒部輔原縄と改めたに過ぎないのである」[注8]と解説されるに尽きるのであって、時には原拠の字句そのままの逐字訳も見られ、庭鐘が「翻して」と言ったように文字通りの翻案であった。

さて、翻って以上の三篇を見るに、庭鐘が中国小説に依拠して国字小説をなそうとする具体的な創作態度を示したものではなかったか。すなわち「任氏伝」や

「白猿伝」の如き白話小説以前のいわゆる伝奇小説の類はそのままの翻案では意をなさない。それは近世初めより累々として用いられ来った手法ではあったもののこれを『伽婢子』流に翻案するだけでは、彼の意図する国字小説には事足りないのである。わが故事に結びつけるなり（故事をこれに結びつけることも）伝奇小説から転化した擬話本の類の援用を得て進められる。しかし「杜十娘怒沈百宝箱」の如き白話小説にあってはそのまま翻案しても差支えない。庭鐘の考える国字小説の創作態度は概ね以上のようなものでなかったか。それを『英草紙』や次作『莠句冊』（天明六年刊）の諸篇について当てはめることも可能であろうが、また他の作者の作品、たとえば上田秋成の『雨月物語』（安永五年刊）を例にすれば、巻二「浅茅が宿」が『万葉集』などに残る「真間の手児名」の伝説に『剪燈新話』の「愛郷伝」を「繋ぐ」ということになり、巻四「蛇性の婬」が「白蛇伝」から転化した「白娘子永鎮雷峯塔」（『警世通言』第二八）に拠ったのは、「旧趣を仮り」ということになる。また「今古小説」の「范巨郷雞黍死生交」に拠った巻一「菊花の約」は「翻して」ということになろうか。してみると庭鐘、秋成にかぎらず、当時にあって中国小説に拠りながら国字小説をなそうとする者の一般的な手法であったかと思われるのである。

五

庭鐘の国字小説の創作態度が以上のようであったとして、その国字小説が如何なるものであったか、そうした国字小説故にかかる創作態度も必要とされたのであろうか。

再び『繁野話』の序文に就けば、『繁野話』をば

彼是九種、併に長談なりといへども、卑説憶談、名区山川、古老の伝聞、土人の口碑、此に述べずんば世に聞ゆまじきを是が演義して、長き日の興にも備ふべし。

いうところの「卑説憶談、名区山川、古老も伝聞、土人の口碑」とは諸国の伝説であり、いわゆる諸国話のことであって、従来の怪異小説のよき題材であった。そのいずれも短篇であったものを、ここで長篇化し演義しようというのであるから、庭鐘の考える国字小説とは長篇の国字による演義小説ということになる。

さて、その演義小説とはいかなるものであったか。庭鐘自身のものではないが、同時代の秋成によれば、

彼土にては演義小説といひ、ここには物がたりとよぶ。それ作り出づる人の心は身幸ひなきを歎くより、世をもいきどほりては昔を恋しのび、或は世の中さく花のにほふが如く栄ゆくを見ては、ややうつろひなん事をおもひ、ある時めく人の末いかならんと私ながらもあざみ、又ためくなき歳をねがふもつひには、玉手匣のむなしさをさとし、えがたき宝をしももとめあるく痴もののうへを愧かしむにも、ただ今の世の聞えをはばかりて、むかし〳〵の跡なし言に、何の罪なげなる物がたりして書きつづくるなん。かかるふみの心しらひなりける。（『よしやあしや』）

つまり演義小説には現実の社会や生活に対する批判精神が寓意となっていることが指摘されている。庭鐘がこの秋成流の演義小説観をもっていたなら、彼の国字小説の諸篇もまた当然その意味の寓意が創作態度としてなければならないことになる。確かに『繁野話』に於ける庭鐘は「守屋の連不言の裏に意ふかく」（第二篇）「望月の寓言に龍雷の表裏たるを断る」（第七篇）とその裏に意のあることを語っているが、先述の三篇についても同様であった。

手束弓の故事に任氏の伝奇を繋ぎ、邪色の人を蕩すことを覚す（第三篇）
白菊の差は白猿梅嶺の旧趣を仮り、占トの前数に因ることを説き、女教の名実全たからんことをはげましむ（第五篇）
江口の始終は杜十娘を翻して、俠妓の偏性を語り、子弟の戒めとなすなり（第八篇）

といずれも裏に意のあることを明かにしていたのである。

まず「邪色の人を蕩す」という「邪色」は、小蝶のそれということになるが、その小蝶の行為には邪色と批難されるべきものはなにひとつない『任氏伝』でも「嗟手　異物之情也、有人道焉、遇暴不失節、殉人以至死、雖今婦人有不如者矣」と、人間に勝さる任氏の貞節の死を悼んでいるのである。だが普通ではその節操が理解出来ず、郷六のように「惜郷生非精人、徒悅其色而不徴其情性、向使洌識之士、必能探変化之理、察神人之際」と、ただ色に心を寄せて、任氏も情欲の対象でしかあり得ないというのも『任氏伝』である。それに従えば小蝶のこまやかな情愛も結局は男を魅惑する「邪色」以外のなにものでもなかったということになる。

されば小蝶が狐の化身であったことを知っても「雪名、夏人も迷惑はれながら、女房を慕ふ心のやまざり」となお恋い慕いながら「二人は本意をうしなひて、大和和泉にかへりぬ」と二人の心はいまも小蝶の虜になって己の為すことを知らないのである。「邪色の人を蕩す」というところである。(注9)

第五篇では『白猿伝』で欧陽紇の妻が申陽公のために懐姙するのにくらべて「陳従善梅嶺失渾妻」の如春が「前髪斉眉蓬頭赤脚」と想像を絶する苦しみに耐えてなおも貞操を全とうしたのは、はるかに道義性の高いものである。如春はたしかに烈女であって貞女の鑑というべき者である、それによった白菊もまたそうでなければならなかった。

菊のかた、年月の度難を熟思ひ出づるにかかる変化の寝所ちかくに役せられ、婢妾の隊につらなりしこそ初の念よわりて潔からず、大いに貞操に恥づる所あり

と述懐しなければならなかった己を恥じて、三年の間その怪物の首を館の後に掛けて日々これを弓で射て痛恨の念を晴らす心意的を見せたのである。その心意気が「女教の名実全からん」ということになろう。

ところで第八篇は、きわめて原拠に近い翻案でありながら、わずかに見せた庭鐘の創意が、「子弟の戒」に抵触しそうである。原拠の終わりで、李甲が船に残された千両の金を眺めるにつけても杜十娘が思い出され、後悔のあまりついに狂気になる。また孫富は、その日から驚きのあまり病に伏し、毎日杜十娘の面影に悩まされながら死んでしまうという、天罰覿面というべく勧懲の精神が明かで、もしこのまま翻案されたなら「子弟の戒」に十分価いするものになったであろう。しかるに、李甲に当たる小太郎は、この所業を恥じ入りはするものの、その過ちも「男が若きしわざ、一旦のいかり解くるのみか、上口の人になれて俗情に疎からぬを悦び、やがて家務をゆづり司をしらしむ」と、後悔どころかかえって悦ばれて家務を相続することになる。また孫富に当たる柴江も、もと〳〵お尋ね者の海賊であったというから、それなら理の当然ということで、折角の白妙の侠気もこれが相手では子弟の戒めとなり得るものであったか疑問である。されば庭鐘はこの篇を結ぶにあたって、

痴ならざれば情にあらず、死せざれば侠にあらずとは、情義を鼓吹すること

ば、両人が身によく当れり、世の風月に遊ぶもの此一篇を看破きて、情のある所興のとゞまる所を知らば、人の笑ひを惹かぬ戒ともなりなんかし。

と敢て一文を添えて、この一篇が「子弟の戒め」たり得るものであることを結論づけなければならなかった。

さて、顧みるに、ここにも庭鐘一流の方法がありそうである。いま序文に明記する各篇の富意に従って物語に及べば、それ言うところがきわめて脆弱なことに気づくのである。第三篇での小蝶の所為が果たして「邪色」というにふさわしかったか。第五篇で「大いに貞操に恥づる所あり」と自ら言う白菊に果たして「女教の名実全からん」ものがあったか。また第八篇の小太郎の薄情も「俗情に疎からぬを悦」ばれ迎えられては「子弟の戒」にほど遠いものと言わなければならない。それを一転して寓意通りにしてみせるのが庭鐘の方法ではなかったか。すなわち、第三篇では「二人は本意うしなう」のも、この女のためである。第五篇の白菊も自ら弓をとって三年の間、怪物の首を射て恨みを晴らす貞節ぶりを見せては、さすが貞婦と納得するのである。また第八篇では、末尾に一文を加えてこれが子弟の戒めとなることを説き明かして見せたのである。

こうして言うところの寓意が物語の奈辺にあるかを読者に探らせながら、結局は説き明かしてみせるのも庭鐘の国字小説であったのである。「此草紙を記して同社中の茶話に代ふるを本意とす」（『英草紙』序）と、同好の徒に見せようとするのも、中国小説をいかにうまく翻案したかというだけではなく、その内に含む複雑の寓意の解明にもあったということである、さらに言うなら「国字小説数十種を戯作して茶話に代ゆ」（『繁野誌』序）という時の庭鐘の戯作精神はむしろ後者にあったというべきかも知れない。

（注1）この体裁は庭鐘三部作に共通するもので、第三作「秀句冊」の巻三は、第五篇「絶間池の演義、強頸の勇衣子の智ありし話」の一篇が収められてる。

（注2）重友毅氏「『英草紙』について」（『秋成の研究』・文理書院所収）

（注3）千田九一氏『中国古典文学全集・今古奇観』（平凡社）解説

（注4）第四篇「黒川源太主山に入って道を得たる話」（分身隠形の法）、第五篇「紀任重陰司に至り滞獄を断くる話」（地獄）、第八篇「白水翁が売卜直言奇を示す話」（怨霊）

（注5）中村幸彦氏「読本の読者」（『近世小説史の研究』（桜楓社）所収）

（注6）麻生磯次氏『江戸文学と中国文学』（三省堂）

（注7）玉上琢弥氏「白菊の方猿掛の岸に怪骨を射る話」（国語国文、昭和十二年八月）

（注8）麻生磯次氏『江戸文学と中国文学』（三省堂）

（注9）高田衛氏「奇談作者と夢語」（上）（文学一九七五・六）で、この「邪色」について、「庭鐘が示唆しているのは、この二人にとって、小蝶が狐であることが判った現在でも、彼女がいとしい妻であるという事実は容易に変えることが出来ないということであろう。庭鐘の文脈では、これがすなわち「邪色」の論理というものであった。」と説かれている。